

No.8 / 2003.10

研究ノート

長岡安平の公園デザイン

・逍遙的景観・

津田礼子

The Park Design of Yasuhei Nagaoka

— Rambling landscape —

Reiko Tsuda

長岡安平(1842- 1925)は、肥前大村の藩士として天保13年大村城下に生れた。明治3年、郷土の先輩楠本正隆に従って上京し、明治8年楠本が東京府知事に就任すると、明治11年(1878)に東京府の土木掛に任ぜられ、以来、明治・大正期の公園の設計を多く手掛け、日本における公園の設計の先駆的役割を果たした。

本論考では、長岡が設計した公園で現在残っているものの内、芝公園紅葉谷、千秋公園、横手公園、岩手公園、合浦公園、足羽山公園、高岡公園、真人公園、比治山公園、江波山公園についての現地調査と、長岡が著した唯一の遺稿集『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』、現存する唯一の設計書である『臺遊園設計書』、及び当時の新聞記事により、長岡が公園に求めたもの、その造園の本質、特徴についての解明を試みた。

長岡が公園の設計に携わった明治・大正期の日本で公園が設置されるようになったのは、近代化に伴う欧化の一環であり、日比谷公園の例に見られるように、多くの場合、西洋的な公園の模倣がなされた。しかし、長岡の設計は、欧米追隨の当時の趨勢とは異なり、日本庭園に造庭の基礎を置きながらこれを改良し、そこに欧米の近代的な公園の概念を取り入れた和洋折衷のものであった。

長岡は、自然、風土との調和という視点から「其庭の精神を理解せず」形のみを模倣することを嘆き、長い歴史を経て造り出されていった「固有の趣味性」を重視し、公園の設計において日本庭園の造園法にその基礎を求めた。しかし、日本古来の庭園が非公開的であり、観照本位である点については近代人の要求に適合しないと考え、欧米の公園にみられる近代的な概念を導入した。

欧米においては19世紀頃に、近代化し市民社会が到来すると共に公園が設置されるようになった。長岡の公園の概念は、18世紀後半ドイツのヒルシュフェルトにはじまるフォルクスガルテンに

みられる公園の概念と共通する。また様式上の特徴としては、18 世紀後半以降に現れるイギリス式風景庭園との共通点がみられる。

長岡が観た日本の景色には、深山幽谷の趣、廣濶、高豁、眺望の快豁、幽邃という要素が挙げられる。また、単調に失せず変化があつてこそおもしろいとある。日本庭園は元来、自然を縮景とし、西洋のものとは比べ変化に富むものであるが、長岡が造園の師とした自然の景はさらに雄大で野趣のあるもの、山水画的な景観であることが表されている。

さらに、その深山幽谷の景を写し観照するのみではなく、これを跋涉することを求めている。自然の地形、天然の美景を出来るだけ利用して極力人工を施さずに眺望の良い場所に四阿を設け、通行の途中の便利の良い場所に茶屋、音楽堂、劇場、便所等を設けている。中でも長岡が最も創意を凝らしたのは公園を逍遙するための園路の設計であると言える。

長岡の造園デザインの特徴は逍遙的景観であるということが出来るが、それは日本的な自然の個性と深く向き合い、西洋の公園における近代的概念を取り入れたものである。